1282
2

近世怪談霜夜星二巻

東都　種彦著

第一回　海辺のめぐみ　あふぎの紅絲

今とはむかしく。昔とはむかし近き頃あり。ある一ッの怪異あり。その首尾をたづぬるに下總と武蔵のあわひに須磯といふ処あり。ここに花方求次郎といふ處士代々館室をひろらくふはきをなわるが。元来貧賊倉庫にこそ富榮只歌を詠詩を賦し。数口の家といへどいとやさしくふるまひ前へ凉てくる滄海に朝焉浪に映し。東に徳房の二州をこえ西に高縄芝浦に弓のごく曲り。毅帆矢のごく飛ぶ秋もゆくく

まて庭前のめぐりいろをあらそひ錦なを猶も花よりさそふ
うじと。あしがるのへぐそなれ友どち六人四人うち交り。求次郎が
よ舎合。酒辺よ出て逍遥し。夕日ふるへある紅葉見も秋の日の
れゆきをかなしら。既よ酒もくみかはしなれハよびなる。爰よ天羽欽次
いふものあり。彼よ一人の娘ありて名を欽次とよび天性うあざやかに
女なれば。武花方の家の侍女よかりてのち。いよ〳〵求次郎とへだて
なくうちらひ。今日も娘欽次と求次郎酒席よつらなり居るが。
あやしむべし一ツの蛇欽次があとべよつれそひて。恰も己がかげ乃
ごとくなれさるがごとく。彼方へつきそひ恨ありげよ見
めらげ。ごとう居るう。人ても怪変よるひ。欽次も何とゆうんあも
なげまく。かのれが腰をさぐり見。薬籠の根つけよ蛙の形を彫り

うとと取り。こハ蛇かど怒念おそろしきものハあらじ武蛙を見つましみ
うんと。投出せば蛇いうとしげよひれらへ。草を見ていつるる。欽次ハ
行とゆうんむうるざる面ものちあ別を告くうへうる。席よある
人口くふ蛇の怒念をさまじ武ぬうるる出れば。求次郎うさねくいふる。
蘭菊の二女こどもの髪の蛇と化し。雄のあぶりものかなて蛇とる
の類。昔今ハ如ぞうふい物つるゞといひさし。欽次よむろひ用変あ
らんよハあをるうをべ。少時武席を遠ざくべーといひ〳〵。うさねて
人てふむうひ。彼欽次よ蛇のつれそあをハ依初の変うるぶ沢ふと
へる女の一念ゆうんとゆふとあり。長物語うるうゆめ〳〵と孟あるう
あげ腰扇うらるしくうる出るへ近き頃雑ゲ谷のおとろ家
田主計といふ者あり。年四十といふ春の頃より風のうちとおふ

るゞもぞらくこは衰へ易れ。医師のうらうとも寿ちゝしなくこんへ
けるゆ。武主計といつる者は書は三年ほどあ分ゆ。於沢とゆゞけ
女児只一人あり。いつるゆ宿世のむらひよや。容貌あくまぐこん
麓の従ゆを髪短く。晝は松の走水よ似く。鼻ゆゞく頬ゆゆ
く。黒き歯の斑ゆは雪をおびゆる馬のごく。眉よかゆる根の声ざや
なれば。これあつく。娶べく者もゆく。十あまり七八の花もいつのゆ
わとふちゆ出れゆゆを。日頃主計はゆゆ病のうちふも武
夏のゆいひ出く。俗ゆ流ゆゆ変もゆゞゆ。ある今はせんをべゆゆ。
月十日あまりゆ。えゆゆぬ風吹赤ゆ。月日のわぞを草の根をを。
つねふゆゆく黄泉の旅よゆゆ流れゆる。於子は孤とゆゆ。俄よ夢のゆ
やゝぎく。位ゆどひつ悲ゆふ えゆど。殊ゆはゆゆゆべ新類もゆゆ

と。俗言ふゆ人ふ鬼はゆゆと申ん。近郷の人て夫彼とつどひ主計が
野辺かゆのとゆどいと深切よゆし。そねゆ武頃ゆゆじあゆ。江戸の
里といふ所よ元房州の産よしく。高西伊兵衛といふ者伊といふ浦
松計もゆく。いゆづゆふ雨居ゆる處士あり。彼ゆ方へゆゆよふれ向かゆれ
ゆゆと。道具屋三次といふ男。主計ゆゆ。笠のゆゆをあれば主計ゆゆ
ゆくゆゆ。家をゆとべゆ子ゆれを屈強の変よゆゆひ一日伊兵衛
が雨居よ訪ひゆゆは豆下ゆゆぐゆゆ口入もゆゆ。我相識ゆ家
よ一人の女児あり。ふもつゆゆゆゆゆゆ衣も美ゆくひねゆふ。ゆゆ
家徒ゆゆんやといへば。伊兵衛不斜丹び。我ゆゆ武地ふゆゆべゆゆ
ゆれば。若武夏ゆのゆゆゆゆゆゆ悍ゆ。ゆゆしく永人なしゆ人よ三次よ
さのむよ。三次ゆゆあげふゆけがひ。沢子が方へ来ていひ出ゆは武道ゆ

わとりふえ出所ハ房州海上山の麓とやうんなれど。久しく出ぬよし
やどるに鏑よ給仕ありれば。そやびやうなる處士殊よ諸第正一さ
者あり主計どの別ちやうのひて。女児あるじまてハ柱なれ家のごく
なるん彼人を聟よなしまへ。ゆれゝ媒妁ゆうとうへハあれ中ふハ計
らいと。ハ三次といつる者ハ已が佑計のうちふ眸一そ。目無三次と
異名せる愚者なれど。かゝる夏の空言ハいと実しくうをうけ。彼方
山方ふくれさまふいひなしる。沢子ハ遠き親類よも武夏ゆへ。
婚姻そのふべくふちうまりぬ。くてその當日ふいうりれば。伊兵衛ハ
殊よ風と柳の粧ひをそへ。既よ席よ臨めば。沢子も今日をそれと
醜きめくよ紛黛をいろどり。嫁衣裳をとひーさまハ袴ふ引き
ゞ冬の月ようぐへ。老女の化粧ハめのうハ味噌のうをとこうこ

いへど。この伊兵衛がさいうふありるを。暫く讐をうつていや霜一ハ香
をなをふ仙花と。臭氣あうそふねぶると。一疑よさーてさむうとし伊
兵衛も一目ふるうう。あるうさてや世よいうる悪女もあうめるる。ロ
れ美醜ハ論ずぶれども。かくとうぐいうで武家の聟とうづれんと。ふ
のうち文ふ三次を恨めども又ふひうへーて。ゆうや是も定夏みく。
うる朔老のなをとうろうんと桃席を同し。をぐるとうもしよ教ケ
月を行。九月のをふつうさふあうる。伊兵衛ハ夜の更ゆ
机上よ短檠をちづけ言史をさぐうく居ーがあハれーまい
むがそさみゆとう障子ひれあけえれば。雪よ降をさうし一ハ
いつのわとふ晴。月中天よをさミのぶり。彩塔てふさ。ゆ白銀の粉
のうぐいゆや布ゆれうへうん碪の音もうぐへさるうぐふゆ

ねさはのもとにハ
りひとさるゑんじ
ゑうらど
こんれいのてい

ふ。こゝにこの王ひとりせい。往年上徳国にさく如此てのてあるこゝ。ひとめし花子が筆のあと残せし扇。里人のあゝ銀釵などこゝ出
あのうえをあくさられど。かゝをあぎとるにしもむべまく。高さ
公のやうせさいをゃゝう。あれ我ゝ人とゆをつゝねては
をゝゝらんまいと。ゝゝう迫を格の名のさぐゝゝ悔度あく
とあぐゝも演ゝあり。彼三次い牙銭ま眼くれて。いとめく
くいひしられど。今ハゝあうも細くゝゝまゝあ。あゝう障子を
反命あくゝうゝゝが。隈ゝれ月まをゝく正へゝれば。行ゝゝくゝゝ
ゝるれ。住吉物語借まかゝせーをゝるといふ消息まく。松のゝふくの
いゝいといやーゝゝを。公ゝくゝかれさまゝるゝ火をゝしてゝくく
ゝれば。某日花子とゝゝしあり。若夫ゝゝと彼扇とゝゝべれば。

ゝゝしくゝゝゝ筆。さてい此あゝまま住居ゝゝゝと。胸さんとつく
とおどり。沢子まゝつゝらふ。あの陳ふまゝうある女文字の玉章い
ゝゝゝ水蓮のあとゝゝゝ。伊人のゝれゝゝるまゝと伊氣ゝれゝぶゝ
して同ひゝれば。沢子い系ゝゝて居ゝゝゝ夫ゝゝゝ芸洲まゝむ伊蔵肢
保といつる人の妾の筆まて行ゝゝね。ゝゝへが隣まゝ綱をゝくをゝゝひ
とゝしる者行ゝゝ。彼ゝ業ゝへ似もゝゝゝ和書の種ゝゝゝく
知るゝへ使をゝゝて肢保が別室花子を。ゝのゝゝ性とゝく
ひゝゝが。そのふゝも彼が方へ表ゝゝまく。日外ゝれ毋重ゝへ
いひまま歩稜れく表ゝゝまく。伊右衛門ゝゝゝゝゝゝ
ゝれゝゝゝくゝゝゝゝ人間の化をゝゝゝ。ゝゝる悪女を表ゝゝ
蒜まゝ行ゝゝゝて行ゝゝゝ。伊東肢保まゝゝゝ。花子ゝゝ

ゑくらひ。ゐうもがると日を経るうち。芝浦の伎保が合壁に賣
うるを使を行く少生し。雲に樣を移し。急ぎその家を買ひ
雜ケ谷をいそぐくとうかつけ。芝浦へをもひを移し。物をを問ご
する行格ゑるし。あやーさ朱をぐれるどかげ。花待ぶを指南
やど札を生し。一月二月をぐるうち。伊兵衛が彼業に長うと尺
び少かのび。門男あきとうりくれば今いうく昔の憂さもあ
いとやうふぞ世を経ふる作伊藤伎保といへるもの。遠く先祖
らぶれば。太田道侍に仕へ一度民間にあらいるといへども。その刻
武功数度にあるのびし。餘光にうて代く畠田あきとめうはさへ
殿造り賞しく。婢僕かくく召仕へば。やどうれ御館にもぐらは
ざる光景く。彼が妾にる其児にれば。るぐしく端居をる夏をく。

伊兵衛も合壁に住るといふのくまく。数ケ月いかりげごふも尺ど
してをぐまる。かくて九月一日といつる夕くい日蝕しのふくて。伎保が
館にる了鬢三人四人庭さいにあるくうち。夕陽を傾きえくいにの
わどふや月のうちうけい常なれど。日のかくまりのふいいるるふや
といへば。あれとそ日のをづうひのふるうと。さるうれかふい入手ふ
り。於兵衛も掾先ちう立出るが。こうぐで保の羅うりその下蔭
をいとうう。前ぐのうつうふわつれて。魚にをくとうかしい術
の糸り初兵をかくをかうしく。衣裳のかわりうくいうう
世の人ともうとびかるしゆふ侍女にもひ東国にて
るべーと。月日ちうを書ものもゆれば。つうぐうの蝕
るぐべくえやるりのぐと。うくうにあるる鏡臺のうぐ

軒の下より外のかたへさし出をり。伊兵衛ハおのが楼上にてあふぎさせる
納涼をなすがため読のうちにありくと思ひしが此ほどハなつかしく
この頃了鬟ホが合壁へ移りきたる殿ハ風流なりと風説せし。それ
若やかなる人にやとよくくみれハ豈計んや上總国にて見そめたる風流
士にあらざれバ。ちつとおもひて楼上をみあげ。互に向て相視伊兵衛
ハ兼ておもひそめけしよすれバ。心のたけをかいつけたる玉章をさしと
おせし扇の要に結ひつけ。側にゐたる女の目にふれざる中に已がからだ
をかくしにし楼上より投下せバ。わかくも花児がうけとれ袖のうちに止め
ぬ。花子ハ白へさしおかれ。おつぎ後をかへり見れバ。侍保ハ只管目蝕
をなづめ。露むつれしけれハひもみえざれバ。心おちゐて。侍女ホにまぎれと
さとられじと急ぎ玉章を袖に隠し。何気なき面持して障子ひきたて

て入りぬ。伊兵衛ハ花子が玉章を取りしを見ていと嬉しく心うちに悦び。
夫よりしてハ片時も花子がことを忘れやらず。夫といへど物いふさへ叶はねば一
夜れバ。門前打交り袖が浦の月見にと毎夜深更。伊兵衛を誘ひ花街
に到りぬれバ。伊兵衛ハ知るかなも若やあらぬ人に傍の相づけに名を
やあると彼方此方見出れた書柳の風流にあこがるゝハ色も香も
なく。夕貞の花白く手折ひめるも拙となりぬ。さらば心を静むる為に
見れバ緑山木の上にも一夜侯森の上もなく。門前を過しなれバひとり
や。閑居にゐつゝ只ひとつくとして。七宵や音信のある明日やらへしぞ
おもんと。それのみこゝろざまりとなし。つゐに病の床にふしける。
嗚呼あはれむべし。誰よかふ鶴の啄をとゞまれ樹に叫ぶ猿ちかつる
をきかず。妻をこふるれが心も又かくあるを知べし

あるあるゆきこんよ
いでくるつもりく
もこんとあのぐ
くよひやうへぐ
かやうろ

第二回　六浦とたり　よがひの備

扨いさてをきぬ。ぬ。休題且話。扶保が側女於花ハ。いろ〳〵ありて。伊茂の家ゑ入ろうしとゝいふ。往年立森觀音開帳の茶亭ゑ行。娘ゑ伊六淑ゑ急想し。彼人ゑ入て。下紐ゑ引ぬくへくもありハざりしが。その依ふきる意雲舞半六といふ光棍ゑとられ。姉ハ和田山ゑ殺害ゑされ。ゑ武孫四ゑいろ〳〵。名ある柳巷ゑ賣ゑさんとゑられへゑ。ゑと泣ゑて一切ものもゑうべゑ。浅ゑ芝娘とゑ。一度ゑそうゑわをゑゑるゑいゑくへ。方氏ゑゑても先ねべーと口ゑれべ。ゑ敷ハ秀ゑれゑ。悪棍の匂引せゑを知ゑ。名ある娼家ゑくハ誰ゑ

於花をゝへんといふ者もあり。半六もいそがはしく強ていなむ
ら竜をらぶれやせんと。供一つ。賺一つ。さまゝゝおいひとらゝ彼ゝ行
きく神ふ浦神奈川といふ所ゝ旅店ゝ。やうゆく空そらの金
ようゝゝし。半六へゆくゝ忘れぞなりゝ。於花い猛ゝ死ぬ是悔ゝ
さ。その夜い寝もせゝど。位あゝし居ゝうけ。おゝよく伎保い仇のあま
縁食の秋景をなぐめ。六浦ゝゝせし旅行の矣路ゝ武旅店ゝ宿
あいせ。紙門のあゝこゝめゝく女子の悲ーむ声をゆつみ。下奴ゝゝび
く縁故をとひいと不便なるふなりひ。なづ彼女子をゝらびと親族も
あゝべゝめふかをそへ身のおさゝゝをゝ。そゝゝやゝべーと。於花をゝゝび出
ー何等由縁ゝゝ此旅店へゝゝうゝさんー。我ゝゝゝみおよんわど
なゝゝべ。家ふ誘引ゆうんなどねどゝゝ。於花へ候なゝゝ半六ゝ

ゝゝとーゝゝ。伎おゝさ憂身のうへ城おちもゝくゝゝゝゝみ伎保
い不便もいやなしゝふ鄙ゝおひゝゝらしゝゝ見えゝど姿貌なる
をゆくかゝゝどなりひ。家長ふあひゝく於花が身の代と嫌ひ芝浦の
鉄ゝゝれゝゝれべ。三位子い伎保が大恩をゝつゝ。いるもゝゝと
羊ふゝく。側室ゝゝゝゝ。さいへ笠森ゝくゝえゝなる俱流士
のゝ。ゝゝのゝも忘れゆゝど。ふゝゝび合壁の情ゝ。ゝゝねゝとめ
ゝゝを知り既ゝ外情ゝゝ。此どゝ伊去綿が扇ゝそへゝる数号
を探ゝへー。いゝふもしく返文をおゝるへーと。惡のゝみをしおゝゝ
さんゝも。ゝゝぬのゆゝのもゝ人おゝをゝのうちふ悲ーゝ。又一ゝび
矣の坊ふおゝいゝしと。伎保がゝゝさけゝくゝ出綿をつゝゝとゝしゝ城
かゝひ出ゝゝゝゝゝゝ。ゝ羽の憲塚。津の西のゝゝゝゝ塚のゝゝゝも

ゑよろこべで。一人猶をぞいとあるる。さても伊兵衛は病の床よりあ
ちこち於花がもめひとりひあるる。強枕をとるれざる
病よもあらされば。ある夜一人孤燈よひとりて書をひらけんね
世の友を机上よいざなひ。むなぐさとす居る。於伏はとろふ
あるて業をあらためむをさとみ抱ほし。伊兵衛よひとつくいん
るゝ。君うく涙をうるうるぐねうつつにきんねが出房のさろうもあう
ねべらくんよ。明日のとゐゆとりのくあんど。ゑをあちひくいふ面を伊兵衛
いとるもいとぐらるさく。我書をひらくとさとあるへ。仮がいぐこと
なれよろこべてあるべ。これよかくつらふよるど已とそとく寝よ
と声あらふ罵れば。於伏いろさん言葉もなく。ゆるさせきへとあ位
さく。伊兵衛が傷よとりとぐる。伊兵衛於伏をとることつたのみ。面枕

つたて机よあくれ。又冊子をあひらけ更よ伏子ふとうあいねばか伏
もせんをべるく。涙を神よありうし位く臥戸ふいろよろう。伊兵衛も枕
をとつて眠ろんとは。不斗側を見れば。ふがひの小猫文車の紙よざ
れあそび居るが。されまぐ紅の袴玉を結ひあるし。いつのやふやうんま
白なる練とうんぐろう。伊兵衛いふうつわどれるよ。糸をあてらけ
さろふいあらも練のうちあるあるる玉章あり胸ちぐろて
ありひらけば

彼こもる　末の松山　やうひも　あるその海よ
よもるくふ　ゆるぐ家の書も　うつせぐひ　ひしの文字紙
こつよるけ　双のあるくよ　心ちぐろん
とあるしあるて於花がふ踏ふもるれば。こい前日の返ーと

るべーとゝよりあるふい候とある赤の松とゝ女のあぐしゝ公あるゝとつぶし
へ清浦抄ふ足ゝゝく。又古今集よも君をおもてあぐしゝ公ゝゝ
足。されば彼もゝれとひゝゝれあるひよて。こぶ庵のうつせ見い世保
家よあらざる玉紙ゝしゝ。昔を三ゥよゝゝとバ廿一日ゝゝる。彼唐土
の名妓が隠語をゝちひ又よ公をゝあゝく忍べよゝとつふ蕊既張旅な
るべーと。病も頻よ愈ゝるゝちしゝ。その夜い枕をゝれどねぶりも
やゝぐ廿一日をゝそゝちわゝう。わどゝくゝその日ふもゝうゝれば病床
を出ゝく湯とひゝ髪をけづり伏子よむうつていひるゝ。ゝれい旗ぶ
谷の何某がゝゝ逃れざる夏ありて新んとゝひ湯をひゝるゝが
ゝふゝやゝん又ゝちゝあゝく世見此書簡をゝく彼所よゝめむき。
如此てゝのゝいひのぶべ。路のわゝるいとゝをゝゝ。ゝ青い行の某のゝと

よ宿ー明日ゝるべーとゝくよ嫌をゝれば。於伏い些も公つぶいと
まゝひーて出ゝゝ。伊云湯ハ只日のゝぶくを待ゝふれど天公ゝう縄
とめそつるゝゝとしゝく。秋の日ゝぶゝゝくゝそしとゝひひゝびゝく。衝く
初更もまゝれば庭ゝれよゝうゝち。ゝび築地よゝうて世保ば鉢
をゝうゝふよ。ゝて。そのゝみとゝゝしく。築地よ横子をゝけゝう。
公ゝゝくゝびゝ伊蔵の前栽をゝう足れば。萩萩落ゝゝくの秋
蕭蕭もゝゝふ咲ゝゝれゝぶ。星のひゝふゝの足ゝく。月の夜
ゝゝもゝゝはゝゝゝゝゝし家居つゝぐゝく南面よ障子ゝゝ
し焼火いとあゝゝれべかゝるく凪入ゝうのゝゝゝ足るふ凪度ゝ
のゝゝゝゝゝゝ。今浮ゝゝとゝ足ゝく柱をゝゝべーゝく琴ゝゝゝ
よゝゝゝ。香炉よ火ゝゝて白ひゝのゝふゝゝう。髪の髪ゝよ節

なくゆりうけうる女白く玉をのべるごとくふを膝のうへにうちかさねあ
なめひるさまよりとるく心をどげよとえうう。遥かのうちうす
二三なる女童そうう来うりゆやうんひそくおぐらふよ人あうさ
ちうで。彼女外のうちとむれうる面をうれば。こぐふべうもうれ其
子なうう。胸ハ裏の格紙ふうさうぐし。女童がちうぞれいづるをちらか
とくと障子をうぐうてかとうへば。其も若や彼人なうめやと。
障子ひうれ伊兵衛と呼るうも。若くかめひめふけしうぐう。
少時ハ顔を紅よりなし扇をとつて焼火をあつぐけち。此処ハいと
ちうるく人のうるもあうんよ方(来うのうと。右のあよ泥叙をうう
髪のあうれを掻あげたよ伊兵衛が面を携(幾間うへぐそうる紅国よとも
うひうる。流石ハ二人ハ言葉も。伊兵衛目迫りて其子をうれ

び上總國にてあひえーとれへいつまで年ちつぢしく誓い春ちきを
うし若木の花ちしぢ今ふ色ち〜咲えぶれるふ恋をちうてかがえ。
蒐もちれらちしく花子が身ちちちよう。此頃から猫のなりぢちふ
く。今青きのべといつる花阪語をとれるとさんと。上総國和
田山まく悪棍と戦ひ。舟橋の釣縄をちち切ーとやぢくちちもちく
ちりれべ。お花もちちおどろれさてい和田山まく盗人ホと相ゑ
となー。妾姉妹をあちをきちひーい君まくありるうと互まふちさ
縁よしをいひ出秋の夜まちとうれざうう。花子ちねていひる君
ふも今かうちのくせしぢく。弥の歌雲舞半六い妾をび殺しもやぢ。
所くの娼家を誘引あるれーうど女の力まく彼を討込んをあひち
ちらぢ。ちちかーとも念とも妾のむのちちをかーちうの人半ち

る彼半六は當地より足をとめ頻刈組といふ町奴の同子なり。
名をばあらゝあるゝ風説より聚りて妾が父兵藤が秘蔵
なるゝ南無阿弥陀佛の文字をとゝろより彫る佩刀を盗んで
半六が美料とるせば是ぞゝーうなる證據。何率彼を搦ーゑー
妾より力をそへ嫁の仇人を討せてゝ君をあらひやらせしも一ツは
此一度をゝのゝらせんゝあれば強ゝるゝ心もあしとて。
まぐとゝ拘ゝる。是正道なるぞ。ゝゝへ嫁の仇人を
討んゝあればゝゝ。側室の身としく主の目を掠め。異人より利情
を通ず天刑二人が身より及ばざらんや。遂より歌を討ぐるのゝ。
伊兵藤兵子が後より為命なるを見ゝく世の人のかへりごゝろもなし
なんぞ誅殺暁をうゝゝれば。伊兵藤これを聞くゝゝとゝる

を兵子少時とかとも。空見ゝゝゝゝせしぞゝ。今青家長
伏保家よりあゝざれべゝく心ちづゝふ拘ゝれど又の逢瀬
も定めなるとかゝらゝ。嗚呼ゝゝる縁はしふや雙の玉みを尼有
の男の枕ゝゝしも。ふ夜衣ゝゝる夫をぞかゝねる。夫ゝりへ彩
ゝふれゝゝものびあゝよ。日を積月をかゝね。あとゞが浦より綱乃
伏保が耳ゝいう。ゝゝゝの者なゝべ怒ゝ。兵子伊兵藤をゝう
ゝゝべゝしが。前ゝもゝゝゝ時あゝゝれる比べゝゝれゝ
る心のいぞゝー女。いひゝゝもせんゝし。只何ゝゝく兵子をば伊藤
が許へかゝんとゝひ一夕兵子を囲ゝる一室ゝゝれゝ。さまぐゝと
ゝれど。兵子ゝゝめのゝどへ身ゝおびゝゝれゝしをいひゝれゝれば伏保
ねて於兵が盤簡をひゝひゝーを證拠し詳ゝ白状ゝゝべーさ

やうふハそろそろいどとのひるふ。兵子ハ後もいろこれそひるれどのぐる
ぐれそもなく一五一十を白地よ話うれば。伊保おかこうれ内方の
伊兵衛を上総國よくくんそめしとあれば。是ほれうされの時人人
皆が罪を嘆んふハらず恥も世よあらるべ。かるうまじしもかが旁
もるるれと。その夜ハ兵子を外ーめ。そやせそはじかくやせはじとと
ゆるひーが。急度心を定め彼侍女歌次が文歌次ハこの頃伊保が銀の
煙管をうれば。彼を伊兵衛が家よろハー。只ハとるく兵子を遣る
べーと。そのとうむをびるるしるふ。二人ハ玉樹もとう泡ーかおーく
ろうこべも。爰よ雅美るハ元来伊兵衛ハ室田の家よ接腕督の
るれば。いろふーてう於沢を退んとあひひるづらふろふー。合壁ろう
歌次ふふでて。伊兵衛が面持あれを向伊兵衛が沢が序あら

ざる間をうをひ。ひるが仏を労をるるれといるハ女房沢子がをんろふし
てう彼を退ろんと商美るしられば。歌次がとうら笑ひ。それをあろ
ろろひあんこれよこーるる良計あんじといひ〳〵ぬ伊兵衛大よよ
ろとび。引出ものるんど階よ歌次よかろう。夫ろしく伊兵衛盃後家
ふあうど。賭よ利を失ひしあひふれふあてるし。於沢が衣るいいさろう。
柳并よいるるるぐ。悲く賣代なし。柳巷よかるひて家よかーらばざる
ぐう主るれがるく。壁ゆぶれ畳ちぶれ連雨よハ寄ろろて柱をつ
るひ。ろるいぶせれ住居るれど。沢子ハ正ーくやろう居くるるく。伊
兵衛家よあぐれば夫となし。諫の言葉をめちふれど。伊兵衛ろうく
ゆいれど。我家よあうざる後よ伝人中ろん汝がめくへものび男のまく
ーをきさしくられよ苦るる者あく。そいろるる私夫よやをそやうふ

はるばるとふかたをけうかのかぎりとなるーもいひくらべ

あいたとるーいばらをさらに花しらをおのあるりこえいあをみたれまちをこうくみきるで

白状なせとねんじどといひうけ。采てゆめもいひわらる伝子をうつて
かさ人黒髪を巻るかうく。赤裸とるしくお獅子せばなふとりび類
言葉もなく伝子ハさぞ位ありのくく。伊兵衛伝子を外面あはさ
いぶし。戸をさーかくわく音もなさど。きづやうへつて外よる。お伝
へ丸ふくき顔よ似気なく。小心なるうもれへ。今ハ身ひとつふ憂
難義のかさるうしらしく。さるべき親類もなくいぐいせんとる西
さひーが。所詮今いさるぐうへもうとも。芋ー江海の浪間よりぐらひ。ふ
楽ーさふ世を経べきと。あるうのふ川へ身を投て死果ぐるぞあいを
なう。伊兵衛ハ良計そのひろうと悦びなれども。ひとやうしろやさ
くて。當所のさるひもなしがく。相州鎌倉丸格のこるるる板戸の
森と夢へーさるうよ閑居をうつ。さるころ抑巷ようひみの

よ利を失ひーハ。ねお伝を退人計策なれハ実ハ赤貧よもあるぞ。
散めづしく舎屋をきつうひ。そぐめ口入きるる欲次をうめく。快保ぐ
方へやつうハー既よ伝子を娶べいよ。その當日をぞ結ぐうるる。
うれうしてふしく怪変あうとなれかうやるざうハ
○於伝伊兵衛ぐ国中の私語よいうてハ求次郎ぐ知るべくハ
なれど。ねじとふてび識さんもものらるとく。
変の詳なると。求次郎ぐ物ぐうをして。ぐる人よ知らしん
を要とされバく。その作なのがるるの体とぞやしき

俵屋宗
一代記 玉井物語 全部
六冊

物語しうは那波の画工種彦が
作とぞ乃言葉孤を（善玉
ちゝ夷をもふくゝ例の
作ちう物語

来巳春刊板當十月本ちうぶゝ〜ゃん

備中屋